

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

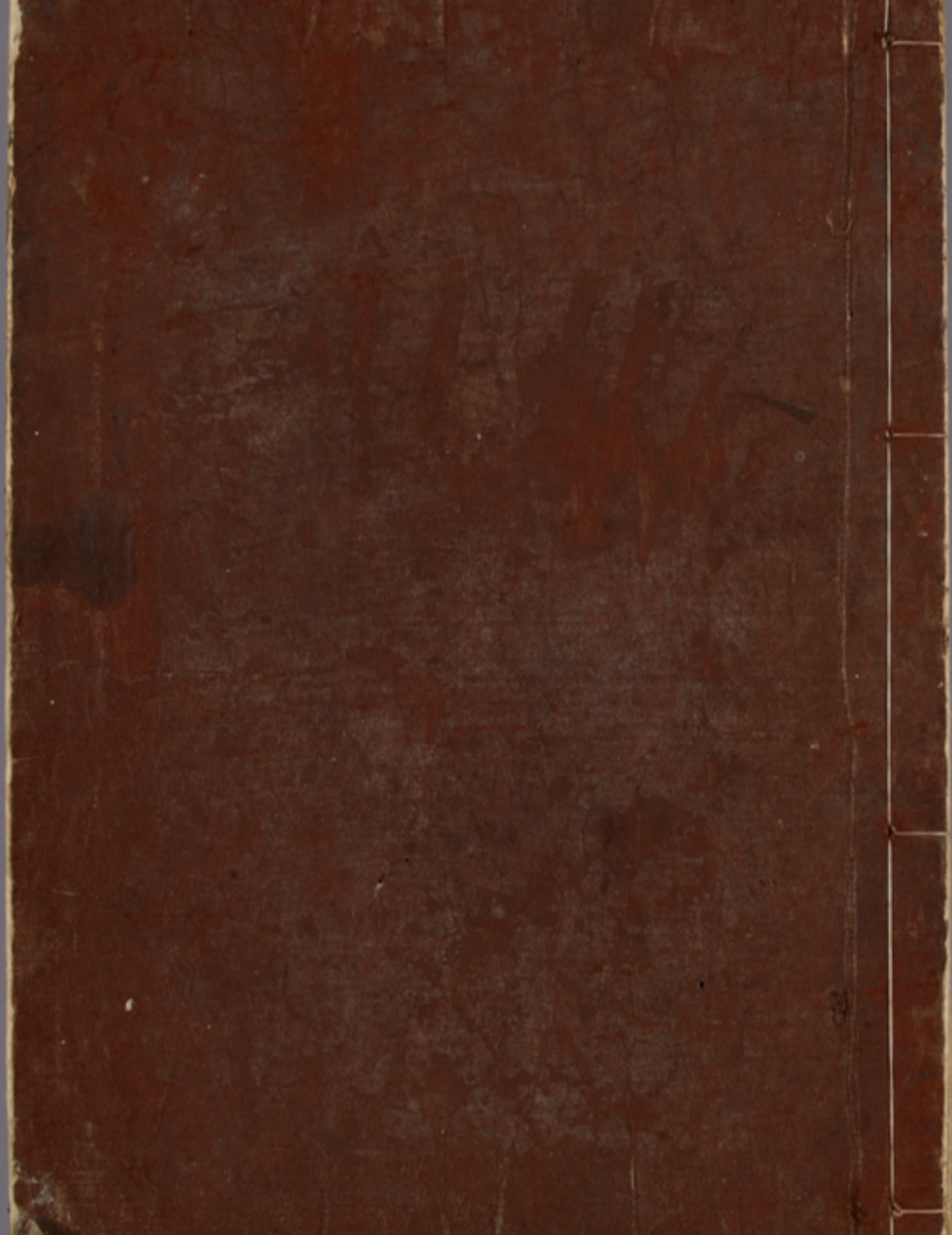
PDF issue: 2025-03-11

石狩日誌

松浦, 武四郎

(発行年 / Year)

1860



東西嶺表山川
地理瓦調記行

石狩日誌

多丸志樓蔵板

凡例

蝦夷の地石狩川の巨大な谷を穿ちて流るる所こそ源石狩岳なりや
去海を二百里餘を舟車とも足跡の奥へて半面をものかへる如く
況や其源を亦文化度問ふ事神交（注）も亦三千年余を少くも
サンゲリマナイも別て物も是潤瀾（注）と来和人杖を曳くは始とて後五十年
年来は其身を以て茲安政丙辰の夏余が十一年申を溯りウリウウ路を
取て西岸ルモツペ小越る翌丁巳の春函館府に於て
命じし源を探り岳を攀り山流水脈を審み歸り石狩志七巻を
著す納むる愛と大に所掲て此一巻を以て同好の士の卧枕小供と
依て之の跡漏あへんり敢て薄紙行あふりたり

と築造を行 五八と欲きは原稿七冊と関し 五河山川地理拾本
英島と陸は物産戸口人少人情地名の和譯とあることありし
番延紀文庫申の五枚は江戸下迄形を及ぼる養蚕豆腐
破窓の下
源の弘志と云

山

丁石將日誌

伴敬 松浦竹四郎源弘著



安政丁巳四月念五日大塚来^{イヌガ}と函館港と發し大井村小宿まで
忍^{シノ}杉^{シノ}内^{ウチ}越^コ西^{ニシ}花^{ハナ}スツ、小^コ出^デ此^コ者^ノ又^マて大^オ塚^{ツカ}氏^ノに分^カ袖^{カサ}余^ノ儀^ノあり
五月朔の快晴刻本船を承て主人スイドサケヌカルと和く或人を
雇てシリベツ川小瀬を舟汁満漲水勢起波濤甚く舟終にナリ
終ふまじと遂て二日は夜に帰る渡りも小屋に宿る
三日稗史の越雷電岳到岩内を乗せベンケを呼ソウツケ切を被る
四日早雇主人の山小屋に夜イクレニケルベレバお宿者

五河の志

二

トウブト 地名なりの方、南川 トマ、タイ 地名 ときと夕方洋石橋番を去るを トウブト
 此所漁屋敷控らしたる美焼矢以依て乙名ルヒヤシケの家に着け
 先丙午の年らう一面の識有去長再令一と度此處を去る原大よ
 収ひ麻肉鮮魚等以て餐一翌朝芝賢一升を我に饋之
 十三日曉天破席を以て帆に換りたるにエベツフト トウブト 是あり トウブト
 亦三番の支流なりと云ふより五甲ありてニッ素を去るをシコツ左うニウバリ川
 す トウブト 是あり トウブト 報を及千歳會所えよりユウフツふゆるなり
 此邊越て予地揚柳 赤揚 白揚 秦皮 榆らぬ程本多 トウブト 只 トウブト 云
 七未んを針位是より丑宮に向ふなりヲタルナイ岳をたり トウブト 云
 カバトと鶴首 トウブト 所ありホルムイ トウブト 才十番は支流源を



ユウハリ岳より登りしまにゆき老鷹ワケヒス鳩カクツ共外行り耳馴ぬ小鳥
 多く啼く面ふりうらぬ柳ハナヤシの枝象のゆく船中へ吹落さるるを
 其息をふ園ウヅをきりヲカバイ地ボロヒリ地をとりビバイ地又タフ地を
 ちよ一挺の銃を持せりアイランケを上陸させ舟を三人まで上せり
 ビバイ地イロ地は所赤丸の支隊源を是もユウバリより来りては是と
 色ハヒテ一縷の紫烟をたきりてややアイランケあり最年一丸
 小屋は又度とあり止宿の用意は余も罷りては訊をすべしとあり
 舟より所と岬江ゆきゆきやあり此所陸ハナ方斗お振ぬ舟は
 小舟れと陸と曳越えりまなや語りぬし傍をたをりて去年
 余等止宿をりて又より年月姓名を本り記しり

依てすこし侍ふ一絶を筆に

江邊草作褥一夜枕東流暖々水禽叫悠悠々動容愁

十四日未し日晴山を驟ヒラカ融水勢いゆ漲りて舟人等も餘程苦辛
 東岸まき西岸と共運流のうた掉ウツさりてうらレベツトサ
 ツビナイ地等同じく舟地をとり舟をウラシナイ地へ着き此所
 去年をとり舟トク地一新有るを七年を拓慶を依て川原の舟人
 トミハセを山入り一匹の狐キツネを獲て歸りニホウシテを虫と未お繋ぎ鉤を
 用ひてしユフシ柳ユフシ葉を終つた數十尾陽月下一場を俣りて臥せ
 朗晴三兩日雪解添春漲東岸又西岸蓬庭夢一場
 十五日遊る出船をトミハセ人セツカウシ地兩人を己の家へしりて去る

きのを収以一色不虫精けりや
 キナウレナイ チヤレナイ 雪もさるこの
 所々端の有るもふはる取新く
 ハツとソラチフト ワラシナ あり此
 川才二は支流をり源とトカチ岳を
 来りるをハセトツクフト是才六り
 又はしるもや小人船を叩くと
 黒唇一人甚る程の中より眺めあた
 仰りぬる其乃ん内か文席とをき
 ははん余を纏きり依て是岸にてト三



山如畫人
 如鬼如料
 一葉秋冬能
 前幕無言
 且避瘴氣
 補。

梅陰
 小橋
 野

ハセイタハウレの家を言りセツカウレは
 家着一回乃者煙料針糸虫の
 字をく張りむ書ハ余不各葱一輪
 叫と干銚と文態の油を、茶をゆむ
 家の傍不狸豆 イシケン 粟 マシノ 糠粟 マシノ 稗
 等を作る是皆黒唇の業行りや
 や彼字未と銚を不持まゝ運
 上屋らりも彼方へ農業を教をも
 禁えらるる所不決くは渡りてと
 必依て鍼に横不柄を附用し



平信子

石巻日記
石巻日記

日数経て突匠は里に来てんははこもこもぬきまの常

ナ上東雲以下出船を朝風朝に陸處をこれや一垂揚を新川に
水掉をる船妻のり髪を柳の系をそそがひく朝風

雪口吹る急きりやうこラレラルカフト少物も此川赤七の支流は柳
源をマレケは暖より来るとも也過てウリウフト折トク是亦一の支流に
あ上はテレホの西より南より一是より本川小舟のラファイビタ
ラは所を柳葉舟にそそがれは此も亦舟四艘小舟人等
三舟多人来り我より先へ出立をて追附をり依て是より乙名クウを
一人を呼増しと柳を切りて正暮夫ベツバラ小舟ぬけ所人等二軒
しをエリレウ此乙名と我去年ルモツベ越へて去り者也うわ切ナ夫
小使インラム

ウリウカモイコタンホ
重とやうの種数なり

廉蹄草の類

上川メモホ多
四五月に花盛なり



昨馬州ナ

ナンバンキセルと云ふ

上川イチナンケホ多

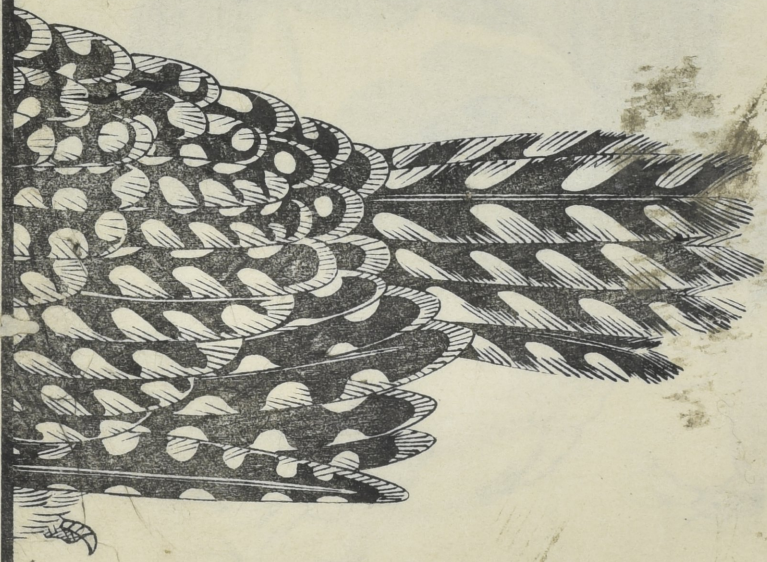
石巻日記

石狩方言

ヲユ、ケ 燕ヶ坂夷地山深き川
喜任曰 日先まて トウカラレヨ
とつ小ま、ママセシとも玄山
一様く舟小舟をさし
手傳ま嘴とホシ
町くおふま



讀書齋主人寫照



シリベツ石狩方言

キサラウレチカフ 主役歌の
毛々耳の如くアガリ
そのう花時を灰白アガリ
又毛を羽毛は斑
クスリ
か

喜任曰
花斑鳥



死すとも必す後死したる者多し一墓前小供をぬ妻我にチライ二
足と印籠を扱此を反熱て平地曠野ゆく種々江賣子と有る
別て蒸多く生るる扱片揚ぐ喰を〜と土人等も奇怪なる
之を食料大に食ふなりと教示一星ぬ束一絶を織りぬなり

孤村夕日没樹裏炊烟生驚聞熊見吼當頭新月明

十七日早明の船水夫五人を〜と〜と〜と〜と〜と〜と
音小驚きおき〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
水勢危敷敷なりナイタイベ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

神変 扱ベツバラ 扱ケケリ
ガモイコタン 扱イシホセと〜と〜と〜と〜と〜と〜と
レキウレバ 扱〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
荷物有所

荷扱を上乗りの〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

レユコチセ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
岩家

宿人〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
滑り岩乃〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

水子扱就沙魚の〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
扱〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

チライと〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
赤茶天麻 扱〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

薩摩芋の〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
来り〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

十八日早辰出遊は去入るの四や水とて嗽しむし先よりおと一
 同は去入不椒道一余とクウチシコロとまきて新巖を攀巨石と
 飛る之怪息を創製一この名區とらんおちたホロレブレベとらんを
 西岸より川中へ降りてまふ一つの淵を飛せぬとてホロレマとてな
 るまよ水中心にひらけ烏帽子の如き突出たホシレブレベと前河津
 まで岩感きつ所へ降りてホシノミシタルマイ ホロミシタルマイ等のまう石
 を中へ挺おしこるお獅子の如きと云ぬと処よりラナエルと云ふ所の
 名おとす大岩の上へ下り去入るま下の湯をく深潭お揺蕩とまふ所
 外りと傍お鬼の足跡とまて凡三園斗の井の如き穴三つあり深きたつを
 一文條又獲て五つありてエモレケレと云と山霊鬼をわんやとて此より

カモイ
ニライイカキ

又先を切て所と云サヌレベリと云ハ兩岸へ愈獲てより其上
 水渦をまわりテツレラナイとて及南岸へ一條の飛泉とテツレ
 とと水底お柵と結りぬく一とては石垣のおちのやとての
 ルイカウレとて昔一石橋あり由は伝はるるとハルレナイといふ
 あり怪レキウレバハルレナイ此所をさし一石版ありて丸木形も五六艘位
 ありおちるこカモイコタンと云あり是より又舟をよこしつるま度のるん傍の石面お託しを
 水聲耳既慣眠到東方白雲晴日三竿起来先漱石
 残山又剩水危棧蜀中同歴く記奇景筆凡慙技翁
 山水両奇絶神剎與鬼二者来皆破膽造化巧無窮
 嵩躡水愈怒吼く恰如雷属目皆堪記愧無華客才

石橋雨後
石在



弁皮衣
殿足
魚肉食
資量
在此山

神庭の園
多石を掃く人
合江

河裏
長存太
古風

木堂



波野志

十一

六千余支の者あり手拭一箇を置て

舟日曇天竺梅のうほに圓曆舟入梅舟及少列の此地幸儀修

女二の船一クレーチンコロ タヨトイ シリコツ子 トミバセ等と連て

チクベツの船一ベツチウシ小列の此所人聚ち新シリコツ子 バカキラ クシタク イソテク タレカ

一と五ふたへは是より左流舟を舟とよとさる由ひり依て爰舟を

並川筋より陸より陸地箸筆鬱葱と是より酢辛筆小魚

穀一午後を路おゆり是よりおりけり夕方岳の麓

獲りて宿及しり狸ヌル正と獲たり七ツのつたに

女二首仰堅雲の上をありきた頗る重し四と折木はより西

の方眺屋をん方行是より岳の麓依後西南に向ひ夕方ベツの

川筋おゆり樹木を登り一足が小宿をさ感あ爰夜お寐

女二日月影をい出足ケンセツと上ありかきこもとておと

冬毒度四とこビの禁ふ出爰より回路を及山を後りて冷風燃を

黒烟天を利とををんず人の立へビベツと出をより涌出より

故よ水小酸味ありといひ忍り岳嶺よりと新依て下た七つ以

本多た出ると茅葎不出火を放ち宿中焙火と燧を安懐候

女二愛憎無吹立火未収出と燧中をわらふおそ大に

川の東岸依りるより路夕方ベツの界へ宿一翌

女五の宿の蕭々チクベツの上に出爰後人家の曲角お出さふ先達の

候本を水小押家され渡り難きた川原を大声を呼り

石井山誌
石井山誌

胡女一人也其の番屋の廻り道を指し異なり

雨餘畧約断其如道路阻隔水對老獠水聲攪人語

女六の夜中より俄に想は水源の教習人を定むビヤトキと太は手と
能く喰らひて只たのよ一本も不具あり山井のつや委^{クワシヤ}友故た
是を魁首とシリアイノイワンパカル セツカウシヨ人お申はる

夕方味本幣を伴せ山井少新 兼酒一陶を閉

○山、雪映天冷。水煙遠樹斜。沛然一夜雨。滿澗糝揚花。

廿七の早起解纜を七八丁までMEM 此所人家五軒 ^{クウチシコロシユ}
^{シコトイ} ^{シリア}
ワイラ^{カシトキ}ンケ^モムトと居曲る小流の涌出所とありこの邊の
老は必^シひとも駿火五六疋を飼もつ其の所を向か小鞋解

は川は潮もや毒人と指檢する取とも老安のそむのをひ難くも加

大おとともともとも折能くはと朝と轉舵を多く擱し是を一尺

きと大の川岸お強めた轉川より上り来り沙汰にまらぬ大

飛のて直に取を咬て持来りふを外のまふ融を附もり好

馴れ方甚行儀官友物行依り此まの老海はく大と大切

我の食とも毎小食ともち此^キ飼養り 秋味のは七一日に四五束

も取獲ともや取又出船して上り水勢いよく急岸流本

ありウレ、へツセラチンカバ^ヨ此所教習ビヤトキの家も川をたて

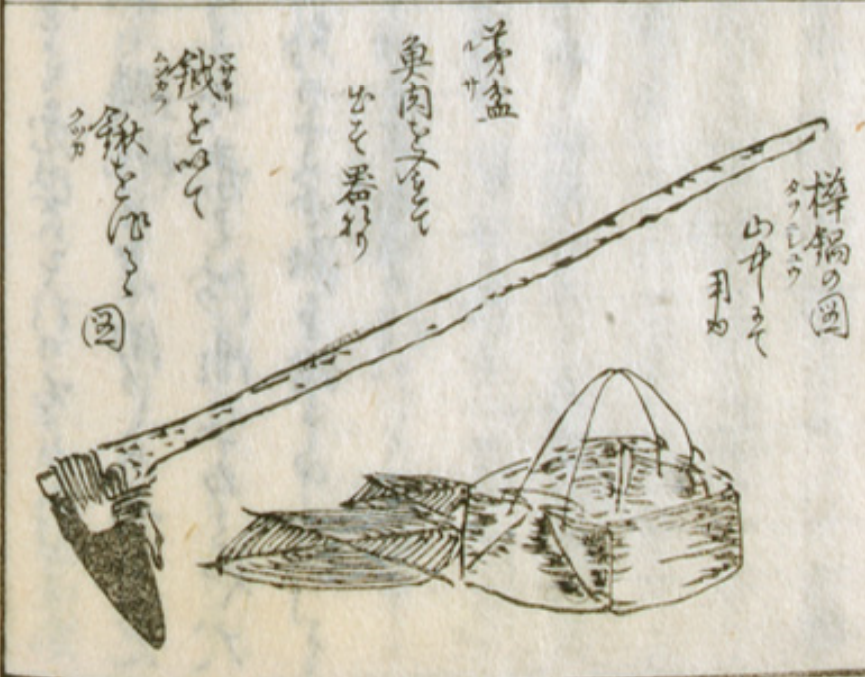
所、築柵を作り上り轉る取由なり又黄^{クワシヤ}脚のあき築主一

不日のあき陸^チと入斗の鷹^チ多く群まり然を先人をも離

石井山誌

石料
不様

びるをきいて捕らへんをいふてウエン
 ギウバ北又サウシベ同キンクシベツ同字此
 所丸人家ニ有ク又須更ヒラク
 してアサカラ爰も人家此所
 百を采り一ニホウテアイランケ留の
 多く供よ出逐ひぬ余ハ蕎麦葉具ユリ
 母の園子と乳羊根を煮キを也
 飯卯とははは是も主人の砂糖也
 云一笑一同の老を振并す一
 延胡索 アンラコロを一袋并す一
黒百合



種也も異なりしてウエンベツに宿を此所人家五軒コイツチユウコエキ
 エナラアニ 此所へビ、の主人も呼びてはおもてをす一ぬ

蓬窓山色曉乱柵水羊流烟飲朝暾上處々聽鶉鳩

廿八日朝霧濛々上陸して南岸を眺み十甲四面をも思ふ曠野にして
 茅茨款々虎杖種々れそを驚り昔日に此條の川を籠り目お降るん
 去く石嶺岳は藤を一眸にた後をわたりまを此方後牙や蒸煎の石成
 使りてけりお海は満ちてぬ主人と是をドンブリくくをきき
 行に其言は風をみりて晒さるりと故に主人は法をきき
 風呂おの事外の道上をあぐ中の掃除をもを移んを入す
 むの病氣をて温泉にも浴をも也必し衣後を脱すて着り侍

石料

石料
石料
石料

山蹊與水涯原野又林樾晨發認熊蹤暮天投狐窟

昨日起嗽湯沸水烟滿洞咫尺不無安不異域之無有矣昨日の晝老
お彼勢しんしん川涯のらんを促お川岸を五岸絶壁のふ
しより新しゆ又是より魚鱗悪し老樹折倒箸はりて錦お新し
け所は是口弓矢と紙お一囊の末を捨へてしるふて氏此所より
区されとまた余も再警特し然も如し酸辛と膏て故の積り
國家の爲と相笑つて此をまた兩岸を戦てて老樹をまた漢侯
舟中にとりてたてはてははるる茶は又一時舟を山とて此所青木
まをてや丑寅の力にテシホの巔を人寅舟おチトガニウレ知せり
眺みぬ又りと須更よて西きよ入りてり半時舟を小川に所と

るこてアングラマ地地のまお出る喬木を倒し橋をけ向者よ越此所献春菜

胡荽草カクシ 旱藕カクシ 又姫石楠花一面おさるり生長り土人を是を

茶の代お煎くを吞り香氣お佳く又一時舟樹立の山を重路は便り

下りてソヨマナイ地とてた知此川解多きより捕まはるき舟に依て

爰お一帯しん川お入た水の冷かきり足先お切舟に終時お五六

十屋を舟り又久刻まし山鳥数多を人嘗て鳥雀の類をたてりや

向岸お一つの渾る是とルベシへとてや小海峯ユウベツへ昔く越て

次月れりもや其奥お先程かへてチトガニウレを又たてり扱土人

等と樺皮と剥て丸おを補理是を曲て筐し是を飯をた

又梳シ櫛皮をシ作りて其管舟を不棄とてり

石料
石料



石狩川頂上の雪
 多量に積るる
 製



石狩川の
 頂上
 多量に積るる
 雪
 製

石巻市志
卷之四

水の考本々の為に身馴とて結ぶもやをきき杖の那

閏五月朔日曉に涉初陸處也雨樺皮を曲羊を仰り是を被く出
思らく江村なる片の氷を煮てんまを踏さるの教をく
異域を感或四とて見らう又望まのまをこりわびへウレい
小川の岸はあう此を其々本川の兩岸を峨もも未登りて是を立
厚き所行く依り我を是らへウレの川すらり大昔糸の井態を
惚らハとこととさう岳の良ふら此を雪路をまも樹木を
扱は解らりわあ歩り去暇取まをさるる物り少時又本
川の上をさるる断崖なる下を降りて獲る怪石は有
り玉烟噴出之是を問ふ温泉行る金く土人き余は

東面へ連来りし是を久きもの由にわらまはつり外難き
扱はゆきを矢のぬ又七八丁上り岩窟とあり是を岩をま中
を威凜然と痛くせん焼火く臥り

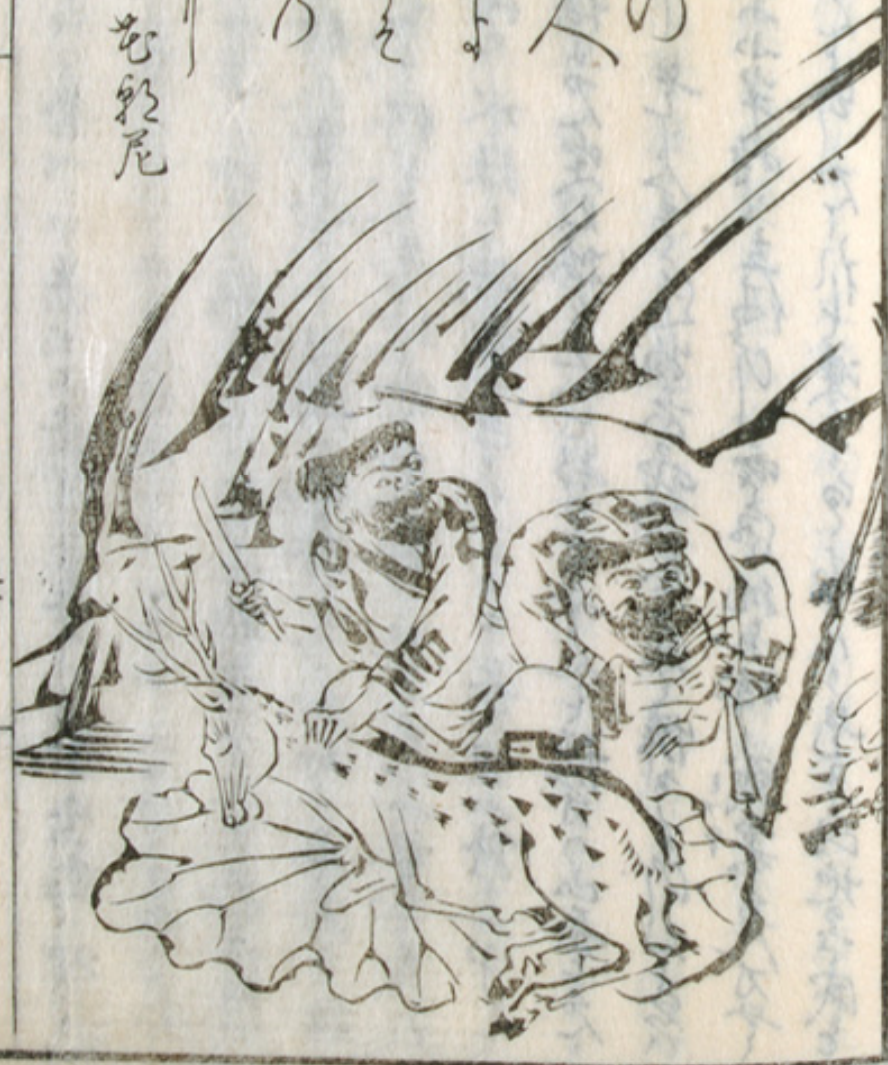
二日積雪如銀に老一上り凡一時計り山凡すま雪ら旭
れり多し四方一面は霧なり何れ力に新山に屈曲する樺木
枝を所風よ引て怪友板をりね整時たりて霧は漸く吹拂り先
方より北の方よりテシホ岳并ニトガニウレユウベツまたまの二ツのさか山を
力く土人しと何もの山もさるるをあらぬあはトコロの山も思ふ
家尖りて雪海の上は突かき後集又志らり上り頂より
此後レコング移るる岩山は五鬚松迦ツツより実なる種を友りぬ

石巻市志
卷之四

二二
三三
四四
五五
六六
七七
八八
九九
〇〇

いふものの
いふもの
あふせよ
あふせよ
あふせよ
あふせよ
あふせよ
あふせよ

花野



二二
三三
四四
五五
六六
七七
八八
九九
〇〇

二二
三三
四四
五五
六六
七七
八八
九九
〇〇

霞谷寫



二二
三三
四四
五五
六六
七七
八八
九九
〇〇

石松山記

西南後きチクベツ岳ベツ岳ヒエ岳等々登りて峯密馬の背の
如く連綿ありきとトカチクマ子ヒリサラロユウバリの岳より
を登りて如く雪中は皆氷の如きなりて時時眺望の間に雲霧吹散
四面もも雲の祥ふ鬱遠く波濤の聲を聞くか如く其急を指
示する所なく何れも是れ必く分難くたり大不望と云ふ
然るも石将の水深と此岳を登りてトカチ岳の石小降りし
正さる所は慎み人定ぬ拙を人と稱の云々人とは方の山岳を
るべきなりし是も今も遺物あり我の志を悲しむるや
終りぬ杖爰に小半時も立休むる雪原氷を踏み戦栗を人乃至
梅飯を食ふと如く人れと凍る白くぬるは是も此地の感と

思ひぬる如く依りて来りし本幣の柄は二徑を行ひ上るに一回は拜りぬ

三日己攀盡雲巖與雪肌仰看天地大俯覺氣候異

杖是より三度松の枝を折りて屨屐杖を小脇に抱たりて終
小半時に昨夜の宿所の支宿ぬ爰に一椀米を粥に煮て食
山上の雪と氷をいりて道之急きたるペウレの川にゆき
二日早辰出立雪を降きし如きことか履はくはアングラマへ
四之の節をゆりしおサンゲソマナイと云ふ也トミハセ後痛
を固より夜に入ると降りて降ゆぬ杖を杖所まで登りて

白雲はまをまはるはしる糸糸心かた大歩りしり勢

五日雨大して降るトミハセ此等の焼酎壺とて神甫湯と云ふ

石松山記

石橋山記

豊くしつた所より快きぬ扱ふもつらげ川も増中と越さくま
極よあつたを空け増えし故濁く臭い雨を程く振合ひ此滞りま
喰と如何き人と一同ふ心配を取きくも夕方シリアイノ一匹の鹿を
崖の前より射る。是より先素心しつた夕方おの快齋を

熊洞連夜雨食盡殆空囊一箭殪麋鹿當充三日糧

六日快き為え色ぬ拭掃るも男のた小川のとも昨暮りのを素ま
大に減と一故出立を其てお川のとも増えおとお人るのちおは三百
牛は此の増し一派ぬまより川を俵たたけるゆもちちうり大に
おりしつたともまイチナシへまより夜トコンの東を宿りぬ
七日お曠野春秋供子の方お生長ウエベツへ暮し是船もつたとも

け無増舟矢を射るも男一社一三派をを汲捨居らん眩い斗く
今よ到りし春をさつらん。俵を流し斗く夕方大番をへ宿を

黄昏下溪水新月掛林梢篙天頻勉力沙灘舟易膠

八日浪も消る俵流の人は星を定むトミハセ セツカウシ タヨトイ
九日浪も出船を必頼る霽イワシバカルシヒラサの二軒おまあを 村並

なるレキウシバまあは夜露の写す人まあ此地もあつ掃く俵くと思ふカキハネ

十日雨を程くつらうベツバラう宿るは宿屋の傍お藜多うう今よりし

一葉もお宿るを問ふは此よりし宿掃く俵をさくしつたとも

お地のつら自由けしつたとも夜我はシマクともあつた人枕を

臭と入船の油も香を振舞居るもて藪もくららん人おり是とつたとも

石橋山記

石松山記
新編

十二日水烟濛々咫尺をわたり山嶺 五つほどウリウフト下る是より
ウリウは掉下り此邊に遷流のまき多し山々のまき水勢少くは
ヲモシロナイともと夕方イタイベシの川口より宿を夜帳多く宿味
好むとて宿をとりて丸木船渡のまき 宿は此のまき

十三日曉霧如前日故時四つほどセヨロヤあたりに到りけし所 右の方
二つほど山嶺多し山嶺ホツキ 柳沢の売多し附りてと取れ
まきと妻人等禁めぬとて成の方凡そ三里にホロシリと云丸三つの山を
下りて是を知らず其山は其山に領するを知らず故リコチウレとも未
のまきルモツへ順のラベラシベツの山源なるまきヨウレツの海 坊主と
巖と川保凡そまき山は此の方まき下り掛りて他山地を閉ぢるとて

ル、モツへの方より閉入りて便ありとてあひゆるる板まきりタトシクウ
カルウレをまきりてやまき山をまきりて山はまき山を勢も強く依りて
二人を山の上より曳き下りて所も夕方方チカベとも山に宿を夜に入
るに山は山嶺渡りて山嶺の款々の葉を取被きり凌ぎ

奔湍数十里。激浪雪成難。坐着雲遮嶺。轟然送雨来。

十四日杖をきりても山嶺を勢無急下りて山嶺 俄と山嶺を過りて未だの凡山
とも山嶺を五つほどルヘレへ エタシハツ 山嶺を過りて山嶺を過りて山嶺を過りて
水より舟を押さるる一凡九つほどとて

神宮より西山嶺十丈懸まきりて山嶺松木如く生盛る川中へ終
七八日山嶺底深く懸りて山嶺一面の懸成り傍り岩を水渡 余七

新編
石松山記

石神
石神

レリアイノセツカウレの或人を連北岸岩壁に括檢を杖。一巨岩
 怪石の上を飛越トビ越コユ越ハナミ越ハナミのりやこるを居るまを友岸峭立せうりつを尋草状成り
 したるに歩窮るる勢運しん海しん我しんよりとまらるるチライの二人
 四人の物群居るに括檢を杖と必形象怪も鱗蛇うろこへびの如く括
 檢を以て四人汁の物を二尾得りしに嘗て異物あり其葛くわを解
 鎖石しんを試むるに十尋ありて未だ底を知らざるを鎖石を重くして人をして括
 檢に懸る中より切る事三度突お奇とて一人岸の流木を以て
 杖を解り是より去る事一層を屏風を辛くゆき方を辨て
 要するより奥の穴七つあり一條の隙をかりしより下りて
 隙立すきだちの如く千尋の如く一時も其く如く彼欄狂辛く近くおれり

四世

維昔都招討崑崙探星窟宜科
 百世下有人繼遺蹟壯志鬼神
 助蛟龍遊且伏濯足九重淵沈
 耳千尋懸踏來幅作畫奇變堪
 矚目知此方寸攝一部河源錄
 楚江小文川田潤顯



石神生居る窟

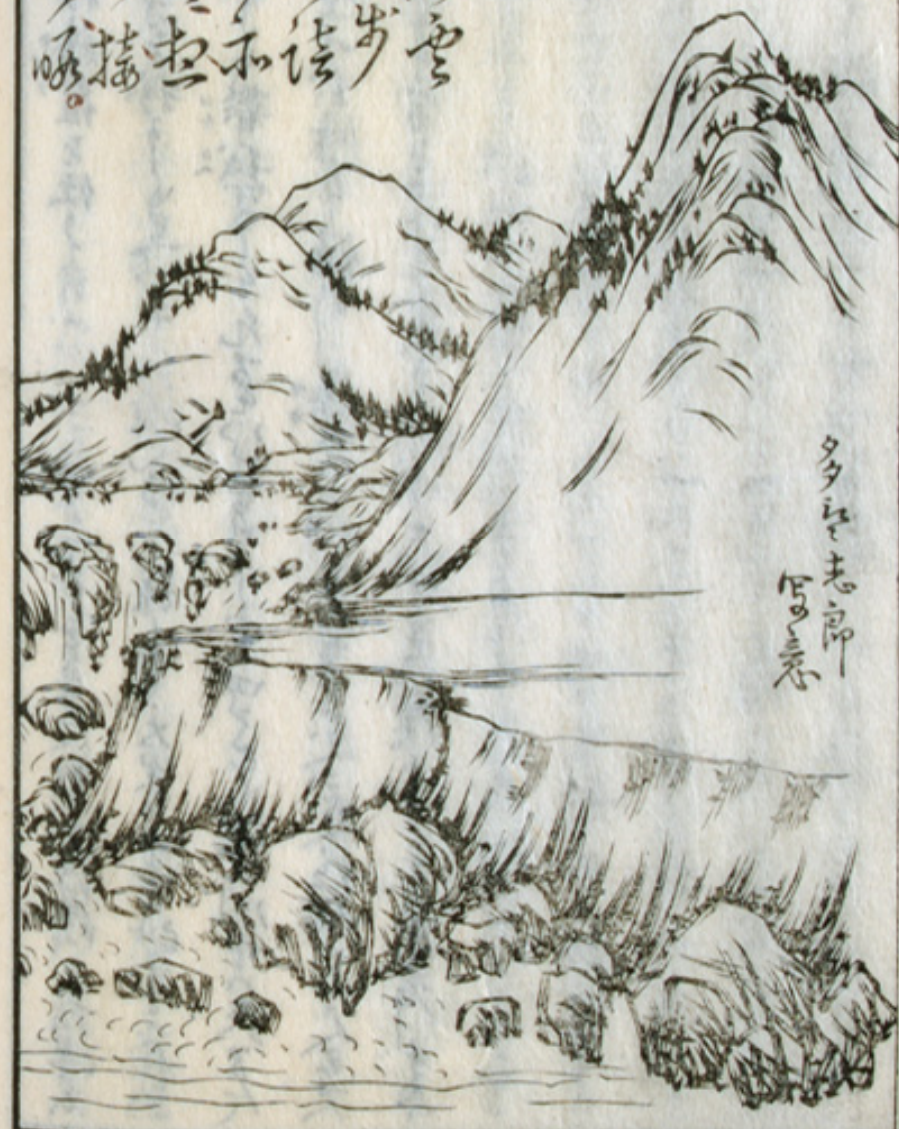
石神の志

傍を依て五層の岩より勢を眺望した水烟吹来り乳をくすも海
新しき紅梅面を傾しや映る中紅霞の如く輪を瞬とる方
我々の容も彷彿と瀑布の面は紫金の色に映れ夫人は是を怪し
計と称し余をも我々の人の氣の味をも以て論議す夫人は山雲のふ
とく低頭する候よりふしう余は海をふのチライを此ふまにた海面より
尾の紫金集を現ぬ是をみて漸く夫人も我々ふふ是は又従り
素より仰る是は阿波の國權頂の不動の素還と稱せり同利行
彼とききしうに海面は雲のうら火燭の燃るやう有る人々不動の形と
なる此は異なれ極く夫人の言に任せて一葉とも取らざり別
ありやりの大く遠く生きた便を病み及石とあり白濁する不英を

ぬ又少き琥珀と多く拾うる品座と同一然るを白霞と晒すは
切能は為さざる思ふにあは見えは顔松の脂の玉舟を凝りしものり塵
を吸ふことと南極産より白雲一は深テシボのうらうらと
十五日宿未散起て艤一たる儼然船より打入扱す方おキナを立
所りしうらワソカリとて水とて夫人もみんを不辨と稱へたるも
はる安ん眩む身なり四とチカへる者一夕方イタイレに帯ぬ
十六日暁霧の早散を午後トツクは暮れし凡
十七日曉霧如例出立ソラフチフトより入須更はラホンゲツラレユラマ
ナイと越此邊屋敷あり針俣を辰巳不敷る凡と九つとをより
た名道く高山樞本立行る者崖石炭とんとり敷友ナエークラ

石村

雲海
山巖
生雲
黃嶽
不
異
情
想
生
無
暇



多景志高
石村

古
山
上

大沼

精



古
山
上

不存

夕方ゆり来ると瀑布の下より土人等能解を数ナ尾取獲、余福岩より
啖く大能を眺せし居れば何れも漸の面閃く物なり刀人定むると
魚の能をよめ其方時を目見閃くとも其方刀人富られり
ては是の時魚りとも知り然もも都令て与増と十度
一度二度三度只も其の味を其方刀人富れり
すは能くと能解チライは一丈位をよめ
よ上得と依りし能より上は能と其方魚似まか能に土能の
と我ら鯉の能門はよめを深く怪しと度漸くの時も虚談り
とて成ちる然もも其方丹る家の画やく魚も素麵を喰と
松半優くと物ありと板と能の西一の寺瀑と成とるる終一丈



極天地より能多し其の序
を板
白くよめを其方能に其方能
とて能と其方能に其方能

不存

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

沈熙遠曰。天地之氣。各以方殊。而人亦因之。南方山水蘊藉而縈紆。人生其間。得氣之正者。為溫潤和雅。其偏者。則輕佻浮薄。北方山水竒傑而雄厚。人生其間。得氣之正者。為剛健爽直。其偏者。則麤厲強橫。此自然之理也。於是率其性而發。為筆墨。遂亦有南北之殊焉。惟能學則咸歸於正。不學則日流於偏。視學之純雜。為優劣。不以宗之南北。分低昂也。余自幼好畫。經歷諸州。而驗之真山水。果如沈子言矣。往者伊勢人。多氣志樓主人。著北蝦

夷餘誌其所載山水。竒傑雄厚。甚過於余所見者。焉。或曰。主人不學畫山水。而得南北兩宗之趣。何也。余曰。主人產南國。萬里窮朔方。故其所寫。能得真趣。如南北未判之時也。夫畫山水。判南北者。官士文人。遊戲耳。養心耳。而寫真。則頗有關於闢國治世之要務者矣。余無官無文。以畫為業。多識南北山水。特未見蝦夷之山水。一日。主人持其所畫石狩真景及草木器物虫魚稿本。請余淨寫之。余辭曰。主人之畫。已得其真矣。又何以余筆之為。乃

書此語於卷尾。以付主人云。

萬延庚申深秋五顯生辰前三日於東台

南麓水雲山房西窻下

北總鷺湖木雄



單山高常書



人

同治十五年

八月

臘月

乙工

南敷本堂... 共... 三... 人...

三九七

